

# 災間

スタディーズ

震災30年目の  
“分有”をさぐる

【#1】  
クロストーク

記録を読み替え、表現をつくる

2024.7.13 [土] 14:00-17:00

デザイン・クリエイティブセンター神戸 | 2階 ギャラリーC

ゲスト —— 松本篤 [AHA!世話人、remoメンバー]、小原一真 [写真家]

聞き手 —— 高森順子 (災間文化研究会)

参加費：無料 / 定員：30名 (要事前申込)

申込：ウェブサイト (<https://kiito.jp/>) よりお申し込みください

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、災間文化研究会、阪神大震災を記録しつづける会  
助成：JR西日本あんしん社会財団、ひょうご安全の日推進助成事業

KIITO:

# 【#1】クロストーク「記録を読み替え、表現をつくる」

『はな子のいる風景 イメージを(ひつ)くりかえす』(2017)、『わたしは思い出す 11年間の育児日記を再読して』(2023)など、市井の人びとの記録を収集し、再構成することで新たな表現を生み出してきた松本篤さん。『Silent Histories』(2015)、『Exposure/Everlasting』(2015)、『空白を埋める』(2021)など、自身の撮影写真と他者の写真や記録を織り混ぜ、ジャーナリズムとアートを架橋する制作を続けてきた小原一真さん。お二人に共通するのは、人びとの喪失をめぐる出来事の記録を編集し、社会から見えづらく、取り残されているひと・もの・ことへの新たな読みを引き出そうとする態度だといえるかもしれません。

第1回クロストークでは、震災体験の手記集の編集と研究を行ってきた高森順子さんを聞き手に、ゲストのこれまでの制作活動を振り返りながら、集合的な喪失体験の記録から表現をつくることや、それをいかに見るかについてお話を伺います。

## ゲストプロフィール

### 松本篤 | AHA!世話人、remoメンバー

1981年兵庫県生まれ。1995年の阪神・淡路大震災の経験から、市井の人々の記録の価値に着目したアーカイブ・プロジェクトAHA! [Archive for Human Activities/ 人類の営みのためのアーカイブ]を2005年に立ち上げる。『はな子のいる風景』『世田谷クロニクル』『わたしは思い出す』などの企画を担当。https://aha.ne.jp/



撮影：池田宏

### 小原一真 | 写真家

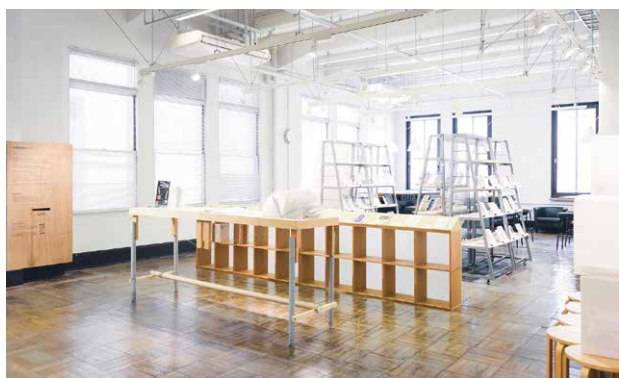
1985年、若手県生まれ、大阪在住。ロンドン芸術大学フォトジャーナリズム修士課程修了。既存のジャーナリズムの境界を越えて、戦争、核、自然災害などをテーマに災禍の中で見えづらくなっていく人々の記録と表現を模索する。現在はコロナ禍の看取り、ウクライナ戦争下のロマ、沖縄のハンセン病回復者・家族の撮影を行っている。世界報道写真賞受賞など。



## 関連プログラム

### ■ 分有資料室 2025年3月30日(日)まで / 2Fライブラリにて

災害にかかわる記録や表現を見る、読む、書くことができるスペース。「災間」と「分有」をキーワードに集めた記録・表現の書棚「分有と表現のライブラリ」、関連プログラム「30年目の手記」を書くためのスペース、1995年から現在までの災害や社会にかかわる出来事を追うための「1995-2025 timeline」、1995年から震災手記集を出版してきた「阪神大震災を記録しつづける会」に関する資料展示で構成されています。



### ■ 阪神・淡路大震災から「30年目の手記」

阪神・淡路大震災にまつわる手記を募集します。お寄せいただくエピソードは、震災当時に限ったものではありません。震災から30年のあいだにあったことや感じたことなど、誰かと分かちあいたいエピソードをお書きください。

募集期間：2024年1月17日(水)～12月17日(火)

募集期間中にいただいた手記は、期間中に一部公開、終了後に原則全文公開を予定しています。また、「阪神大震災を記録しつづける会」手記執筆者とともに集まった手記を読む「30年目の手記公開ミーティング」を分有資料室にて行う予定です。

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、阪神大震災を記録しつづける会、災間文化研究会 / 協力：一般社団法人NOOK、神戸市立図書館 / 後援：神戸新聞社、NHK神戸放送局、NHKエンタープライズ近畿



## 主催団体について

### 災間文化研究会

さまざまな災厄の間(あいだ/なか)を生きているという「災間(さいかん)」の視点に立ち、社会を生き抜く術としての文化的な営みに目を凝らし、耳を傾ける試みを行うグループ。メンバーは佐藤李青(アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー)、高森順子(情報科学芸術大学院大学 研究員、阪神大震災を記録しつづける会)、宮本匠(大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)、小川智紀(認定NPO法人STスポット 横浜 理事長)、田中真実(認定NPO法人STスポット 横浜 事務局長)。それぞれ異なるテーマをもって活動し、災間の社会における“間”で動くメディアとしてのふるまいを模索している。2023年5月、記憶を「分有」する表現にまつわるメールマガジン「分有通信」発行。bun-tsu編集部には編集者の辻並麻由が参加。

▶ <https://researchmap.jp/community-inf/Saikun-Studies>

### 阪神大震災を記録しつづける会

阪神・淡路大震災の体験手記を集め、出版する市民団体。阪神・淡路大震災の約1ヶ月後の1995年2月中旬より、神戸で印刷業を営んでいた高森一徳を発起人として活動をはじめ。1995年5月に最初の手記集『阪神大震災 被災した私たちの記録』を出版。手記集の出版は、約1年に1度のペースでおよそ10年にわたって続いた。10巻までの投稿総数は1,134編。10巻の脱稿後の2004年12月に一徳が急逝し、約5年間の活動休止を経て、2010年に一徳の姪である高森順子が事務局長となり活動を再開した。震災から20年目の2015年には10年ぶりの手記集を出版。25年目の2020年には、これまでの執筆者へのインタビューを収録した記録集を出版し、現在まで活動を続けている。

▶ <https://hanshinkiroku.tumblr.com/>

お問い合わせ：デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)  
〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4  
TEL: 078-325-2235 FAX: 078-325-2230  
E-MAIL: info@kiito.jp WEB: <https://kiito.jp/>



# 災間 スタディーズ

## 震災30年目の “分有”をさぐる

1995年以降、地震、風水害、コロナ禍など、いくつもの災害が発生してきました。私たちは、すべての被災地の復旧や復興を見届け、共有することが困難な「災間」を生きています。過去の災害の記録や表現にもう一度光を当ててみることに。そこから、経験を想像し、分かちもつ「分有」の態度を探ること。阪神・淡路大震災から30年目を迎える今、ともに考えてみませんか。災間スタディーズでは、災厄をめぐる、アートやアーカイブの視点からリサーチを行うゲストを迎え、渦中に生きる人びとが生み出す記録や表現の力について考えます。